

# 朝鮮の字音

金沢庄三郎

神代紀上、宝鏡開始章、第三、一書至三日、神、  
閑居于天石窟也。諸神遣中臣、連、遠祖與  
台産靈、兒天、兒屋、命、而使祈焉。與台産  
靈、此云許語等武須毗とある「此云」は

一切経音義から採った形式で、此場合與台  
産靈と漢字では書くが、此即ち日本では許  
語等武須毗と云ふと注したものである。中  
でも「興」の字をコゴと音読することを注  
意したもので、これは朝鮮の古字音、今日  
の音は hang である。

応神十四年紀弓月、君自百濟來歸とあ  
るは、姓氏録右京師書に融通王蒼田天皇十四  
年來朝、率百二十七果、百姓一歸化とある  
もの、「通」の朝鮮音は tong であるから、  
月の訓に該当する。

統後紀仁明天皇嘉祥二年七月、近江国粟  
太郡、人木工大允正七位下小槻、山、公家島  
賜姓興統公とある「統」の朝鮮音も tong  
であれば、興統はコツギと読み、小槻と類  
音の嘉名を選ばれたことが分る。

神代紀八洲原章 婦人、反先言乎、事既

不祥、垂仁即位前紀因夢、祥以立為二皇  
太子、仁徳元年紀大臣对言、吉祥也、瑞珠  
盟約章此、則神性雄健使、之然也、也の「祥」は  
朝鮮音 Sang 「性」は song で、国語ではな  
訓と字音訓（参照）

其他、山城国愛宕郡於多岐、大和国葛下郡  
当麻郡多以来、相模国佐加三などの地名は、  
いづれも朝鮮音「若」rang「当」tang「相」  
sang に拠つたもので、喉内音の相通である。

垂仁二年紀一云額、有角人乗一船泊  
于越国箭飯浦、故号三其処、曰角鹿一と  
あるやうに「角額」の義で、二方葉集にも角鹿、  
津とある此地を後に敦賀郡留我と呼ぶのは  
舌内音タナラ相通で、その角ある人意富加  
羅國王王子、名都怒我阿羅斯等を本文に任  
那人蘇那葛叱智としてゐるが、「曷」の朝  
鮮音が hat であることを知れば、「ツヌガ  
アラシト」と「ソナカアラシチ」と同一名  
の異なる伝であることに疑はない。

播磨国波里方の「播」は波、去声で音ハで  
あるから、高山寺本「囉」に作るを正しと  
する。駿河国須流加は舜河鷹河とも書く。  
これ等はいづれも舌内音の通じたもので、  
上野、国群馬郡久留末はもと民族名で、アイ

ヌ語クルミに相当するものであるが、今は  
古音を棄て、グンマと呼ぶ。（言語に映じ  
たる原人の思想）（参照）  
その他、万二愛等思需来師、万十霜干多  
柳者などの「需」・「干」は古音で、倭名鈔  
伊勢、国安濃郡村主郷須久利などの「村主」  
は帰化の善人に賜ふ姓であるが、真興王拓  
境碑に「地主」三國史記に「村干」とあり  
神功四十九年紀に百濟、意流、村とあれば、  
「村干」はスキ・クリの古音を伝へたもの  
と見るべきである。  
然るに、これ等、敦・駿・群・需・需・需  
「干」などの古音は今日の朝鮮には一つも  
伝つてゐないが、新羅、官名波珍滄或云海干  
を、古事記に波鎮漢紀、書紀に波珍干岐と  
し、釈紀に波珍干岐、登名と読んでゐるのは  
「珍」の古音トリなることを教へる唯一の  
資料であつて、試みにこれを百濟の古地名  
に徴するに、百濟馬突（音マ）果一云馬珍  
難珍阿果一云月良（鶏林類事月日突）など幾  
多の例証がある。（朝鮮学報、第三輯「朝  
鮮古地名の研究」参照）

日鮮語の系統論は姑く措き、その漢字音  
の比較対照のみにても、我古典の研究上欠  
くべからざることを痛感するものである。  
（昭和三十年四月一日稿）